

今日の福音書は、イエス様のエピソードの中でも、特に有名です。いろんところで引用されているので皆さんよくご存知でしょう。その話の中心は、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」という言葉です。これはイエス様ご自身が本当に語られた言葉だと多くの学者が認めている言葉です。

今日のところには、イエス様の論争の相手として、二つのグループが一緒に現れます。ひとつはよくご存知のファリサイ派。ローマ帝国なんか大嫌いで、自分たちの国がユダヤ教を中心とする宗教国家になることを期待しているわけです。この人たちは、ローマ帝国に税金を納めることを快く思わず、ザアカイのようにその手下となって、同胞のユダヤ人から税金を取り立てるような徴税人を嫌っています。

一方、ヘロデ派、というグループがいます。宗教集団ではなく、政治グループです。ヘロデ王家の与党で、ローマの支配には十分満足していました。自分たちの王様が支配者になってほしいのですが、ローマ帝国に逆らうのは得策ではないと考えていたようです。ですから、この人たちは、ローマ皇帝に税金を納めないような運動があつては、都合が悪いのです。

この全く立場が違ふ、ファリサイ派とヘロデ派が、共通の敵であるイエス様をとっちめようと、質問したのです。「皇帝に税金を納めるのは、律法に合っているでしょうか、合っていないでしょうか。」

律法に合っている、と言え、ファリサイ派をはじめ、民衆の反対を受け、イエス様の支持率が下がる。合っていない、と言え、ヘロデ派が、ローマ軍に通報して、反逆罪で訴えられる。

どちらの答えをしても、窮地に落とされるのです。

これに対して、イエス様が答えられたのが、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」ということ。何となくわかるようで、わからない言葉です。論争の相手は、「これを聞いて驚き、イエスをその場に残して立ち去った。」と書かれています、どうして、この言葉で驚くのでしょうか。

いくつもの解釈があります。

代表的なものの一つは、政治の領域と宗教の領域のふたつを認め、一方によって他方を否定するのではなく、その二つともに果たすべき義務を尽くせと教えた、という説。つまり、熱心にユダヤ教を信仰しているが、ローマ帝国への税金も払って、訴えられるようなことはしたくない。どちらにもいい顔をする、という態度でしょうか。もし、これがイエス様の態度ではなく、日本のクリスチャンの発言だと思えば、納得のいく人が多いかもしれません。お寺にも神社にもいい顔をして、対立しないように生きている。日本のクリスチャンは、八方美人のような態度が多いかもしれません。

2番目は、ローマ皇帝という世俗権力を神様のようにたたえるのを否定して、国家は神によって立てられなければならない、という説。これだったら、国粋主義のファリサイ派の人々を喜ばせることになるでしょう。皇帝と、神様は別物である、という政教分離で宗教の方に重点を置いた考えでしょう。しかし、ヘロデ派は、どう受け取ったかわかりません。驚くところまではいかない回答でしょう。

3番目は、「皇帝のものは皇帝に」というのは、ローマ帝国へ払う人頭税のことを表し、「神のものは神に」というのは、エルサレムの神殿に収める神殿税を意味している、という説です。ユダヤ人は2種類の税金を納めなければなりませんでした。

この答えによって、イエス様は、「お前たちは、ローマ皇帝を第一にしているのか、それともユダヤ教の神様を第一にしているのか、お前たちの忠誠は、どちらを優先しているのか？」と、両者に対する批判を含んでいる、という考えです。

おそらくは、2番目の、この世の権力も含めて、すべては神様によって立てられているのだから、それをわすれないように、ということではないか、と一般的には言われています。

しかし、私たちはもっとわかりやすい解釈をしてもいいのではないかと、思います。

この論争の場所は、エルサレムの神殿です。そして、ファリサイ派の人たちは、律法を守ることに命がけの人たちのはずでした。

ところが、今、自分たちの敵であるはずのヘロデ派と組んでイエス様と論争しようと悪い試みをしているのです。

イエス様は、彼らの論争の中心、ローマのデナリオン銀貨を示して、ファリサイ派の愚かさ、そして、同じユダヤ人であり、モーセの十戒を守らなければならないヘロデ派にも、その愚かさを指摘していると思うのです。

このデナリオン銀貨には、月桂樹の冠をかむったローマ皇帝の像が刻まれていて、その周りには、「崇高なる皇帝ティベリウス、神聖なるアウグストゥスの子」という銘があり、裏には神の座に座るティベリウスの母の像と「大祭司」の銘があるので、政治と宗教の両方における皇帝の権威を示していました。

しかし、この思想は、熱心なユダヤ教徒には受け入れられないことです。イエス様を十字架に架けた、ポンテオ・ピラトが就任直後に皇帝の紋章のついた軍旗をエルサレムに持ち込んだだけで、大規模な抗議行動が起こった、ということがありました。ユダヤ教徒は、神殿内の彫像に対して、敏感なんですね。そんな場所で、皇帝を神にしたような銀貨を持ち込んでいること自体、ユダヤ教の十戒を犯しているのです。

「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」という言葉も大切ですが、その前に、神殿で彼らの持っている銀貨それ自体が、十戒の「私のほか何者をも神としてはならない」「自然のものの形に似せて偶像を作ってはならない」という大原則を、犯しているではないか。とイエス様は主張して、おられる。その主張のために、この言葉を添えられた、と見てはどうでしょうか。

わたしたちの社会の中には、言葉の論理で、相手を説き伏せてしまおう、という態度で、いつも争いをする人々がいます。

しかし、私たちは、イエス様が、エルサレムの神殿で、十戒の最初の「私のほか何者をも神としてはならない。」「自然のものの形に似せて偶像を作ってはならない」という信仰の大原則に従って、恐ろしい論争相手にも、立ち向かったように、素朴ですが、信仰の原則に従って歩んでゆく必要があるのではないのでしょうか。

教区には多くの問題があつて、特に経済的な行き詰まりの時など、苦しい現実を見せられて、判断に困ることがあります。しかし、そんな時こそ、私たちの信仰の原則を問われているのだ、と考える目先のことではなく、長い神様の私たちに対する御心を問いつつ回答することが大切なように思います。